



寛政七年十月十日於義仲寺興り

枯蓮子一雨さくもや魂さ

雨橋

此白觀も影もなれ月

重厚

華は色あまけ小春深き

牧山

裏門たかく人をやうむる

乍及

空高く浄地の水もみりせらる

班鳩

一宮たかく降くハ喜ハおう

巨洲

個人研究費

尾末雄

58-2041

酒一斗かきうらむくく白くん

千景

鳴くささるる きちりまの弱

杜凌

はくくく増かろの太刀をあらうめ

方廣

きめ房の口はいやしき

五朱

手にしそ心とれやく物志み

善忠

おゆときま 鷲もたきり里

朧花

佛名舎 孫もたけよ折かき

荒支

護摩部といくく戒に破く

有文

獨居る 奴も武士の果しめや

無極

養自のうらむ 啼くやきり

潭月

真一間 夢乃たきま 物さきき

藏六

波さいういふ 伊豆の大鳥

ノハ

夏は月富士のふえゆるきり

呂蛤

探さるるのけいさき 要

百杵

目代の側より年引はきり

都雀

掛其石よりし 止るるく

一陽

生魚を 婦人かきりて 喰らふ事

志秀

出雲の娘より ねえとよめる

可能

鶴うぶの 羽のむしりも 夢をうり

花縣

あ通しは 徳子の 旅の ぬきま

元亨

郭へは 今も 家なむらう

備席

麦刈りけりて 仕事は せあつふ

李三

兄弟の 熊の 何れと 求しめ

止菴

兜と 雙ふも 中

買山

牡丹 末さうりて 先物

北花

早の 羽の 使たす

一茶

縁むきいふ 上り ね 配

丈左

その えりて 菊より あり 君

花月

後の 月も 幾人 糸に 止る せ

誦道

馬鹿の 羽の せよ せよ せよ

馬庭

旁 雲と 立 けりて 川の 向

墨古

犬の 種よと 流り 舞ふ

其成

一坐拾香

顔くや塚の竹のり骨に徹く 越后 北花

泥びるるや 康武 山妻のふりあき 花縣

枯尾まうけら 紀後 むら 潭月

口 多伸一幸い 以新 いき 一茶

萩の穂 江砂 けり 繡席

は 百杵

風 藏六

又 ノ

白 可能

醉 京都 都崔

む 止崔

流 孝子

ま 花月

去 雪古

寺にありて何を持くる
あはれゆり

寺にありて何を持くる

呂哈

牛の毛をよきとて

其成

かゝる日はあはれ

夫左

松竹の地をよきとて

買山
伊見

青い毛を柱と丸

一陽
江砂

きゝる毛をよきとて

元亭

時をよきとて

志秀

あはれゆり

乃及

あはれゆり

敏山

あはれゆり

有文

あはれゆり

巨洲

あはれゆり

五来

あはれゆり

あはれゆり

誦道

あはれゆり

馬涯

侘人の軒をみれば 枯屋花
南天の雲を袖とす 露のうら
又或はかけうら 山雲の如
林一掃の時もあはれ 静もせん
杜陵

湖上時雨長等小春

志づゝゝん

十月や鴨たうのぬ おを 澄と麓 千景
日舟月詠百二のその冬ふと 無極

奉納

日南のつゆをば 田舎の夢 京都 蘭更

春のせむし水うらうぬ 春坡

比叡の山 暮花

時雨や 春峰

志づゝゝん 南昌

湖をたふし 桃李

来りてやまを塚うらぬに神は
尼 知了

合はれぬ折に神をさるるに
女 左柳

城のふりて南天の宿をふり
妻 飯

伝るの竹田と流麻には樹木の
窟塚として遠東の今成とてしむ

夕暮の道多し一粟津下の泥むく
瓦 全

志しむやむとてはる花の香
去 舟

逢坂や松と移とぬむら舞
志 地

若くしてはるさるるに
田

時をわたりてはるさるるに
岩 層

志しむやむとてはる花の香
林 鳥

破代りてはるさるるに
原 水

しるるや松と移とぬむら舞
錢 本

志しむやむとてはる花の香
鶴 翅

志しむやむとてはる花の香
御 法

志しむやむとてはる花の香
由 来

志しむやむとてはる花の香
花 紅

すねり帆やきく山の舟の岸より
字眉

うね浪や人待ちのけしき
吾妻

あきし杉屋花よりくくく山
老翁

少く波のちと雨をみ山
養溪 三橋舎

志く山舎や例のあきく山
蝶夢

舞ゆるくくく山
蝶危 石蔵

苦くく山乃伸く鳴くり夕時
一峰 伏見

さく山草や一葉くく山
暮城 大坂

和く山枯や一葉く山
己紋 揚屋

あきく山山草のちと山
其雪

あきく山山草のちと山
芦船

あきく山山草のちと山
保水

あきく山山草のちと山
南水

あきく山山草のちと山
立雪

あきく山山草のちと山
文里 仙中

あきく山山草のちと山
李山

行邊のこころを粟津の舟小 杜陵

温屏や夏にけむりの趣んと次 後 涼瓜

清の田さうの風の吹るり三橋の心 李朝

と川舟月夜鳥の啼けおの舟 渡雪

しづかや雲のむくけしう登 嵐外

きくし月夜こころや西の意 夏逸

咲かぬ 池の志くしう清けり 梅月

花のむくし月夜を志くしう 座美

きくし鳥の古果歌を志くし 如行

しづかや雲のむくけしう登 春峨

きくしハなまのふくしう
そいひのまをなまのふくしう

世の心ちを志くしう 古勢

きくし人歌を志くしう 長門 文川

あうしうのめを志くしう 楚柙

きくしや殿のしうを志くしう 羅風

きくしや殿のしうを志くしう 豊永 此柱

水晶の生るる水のかき津 青客

鏡をわきまわしおやまの深き 菊男

肌割しきりたるあし紙念 蝸若

和雲やあのをさくお散るる 我百

山雲より今隠るるあし 杜由

水も固て赤くあし細流 磨平

あしをたまたまおわき 馬等

あしをたまたまおわき 馬等

おしりも牛ふくろりし 和を許 並前 君花

しりもや子孫のあしをた 翠児

あしをたまたまおわき 日向 可留

焚く香の煙をたまたま 栞尾 栞尾

音もよこさくあしをた 若校 北雅

あしをたまたまおわき 丹后 木越

あしをたまたまおわき 柳 柳

あしをたまたまおわき 青 青暉

吹上るる風たふらふ春風あつた

第一

たまにみる青のあまのこゝろ

東鳩

かゝ酒ハ半にくらゝ少きうふ

杏里

星明しきまゝの世や枯尾と

拾翠

おもしろや 海へ波の上

友月

影のや 伴はるる世の色

加冬

ふれおまや 城の暮れに

桑五

華路の秋をよむの心きくれ

菟公

深き夕の夕の夕の夕の夕

書二

管燈や 夜をよむる心きくれ

宣谷

一色に 家も心もあまの自

魏道

あゝや 色も心もあまの自

慶林

あゝや 色も心もあまの自

梅居

あゝや 色も心もあまの自

菊院

あゝや 色も心もあまの自

真潜

あゝや 色も心もあまの自

西厓

素桐を肌をさるるしるしる

素桐

しるしる果は海を渡る夕の那

血茶

さるるや翻るるむ木のうけり

桃五

夜しるや雲はゆるしる松の音

南嶽

おのるや燈をかこるる春のま

雨柳

袖をさるる霞のやむる舞

里蝶

少るや牛の頬をむるしる

唄糸

あがるやまをさるる夕の瓦

樂只

枯野のり人丈をくえゆるる

兀仙

水もた風よまぬるる葉のふ

一蛙

いりり乃おきぬるちりり介

箕山

いりり人まのしぬるるるる

画舟

赤きまのふちりりりり

海舟

まのまのやぬるるるのり

克己

枯草やたつりりりり

五友

人影のゆるりりりり

元二

栞くれば百鬼のつけやその月 涼亭

足跡くちうくくく大根引 越中 素行

人通ふ道と結ぬ 壺乃原 壺仙

冬枯やあふまかり 苔もぬ 信濃 五什

菴の翁帯まかみ 冬も結 蠅 猿左

芥菜の姿戸ぬし 夕文付 柳莊

月代や雪津 一夜の山 文兆

誰をくはまぬ乃鐘のくらさそふ 路人

而きや 雀のむし 秋のむし 希言

夕竹もあまの命は 糸買子 元化

まゝまにまのありし 夕のむし 杜厚

引けよ水も遠し 夜のむし 里由

月のおや初菜 吹雪 枯榎 素十

まのらに 神もあし 古路中 爐洞

糸のむしあし 夕のむし 一東

海川の葉も 夕のむし 艸司

枯柳くも折る音はかきすけ
蜂二

目さむはし「影」風を紙念
怒風

琴の音はりしむる庭の落葉か
女 知夕

海上の波すさすしむる夜露の雨
吳山

我道の魂やうらうら
少若うら
甲斐 一古

風乃脊中く證く小善うぬ
江戸 雨銘

笠ぬふくく人ありまきうら
遠江 琴糸

音はハまをうらうら
たれ雪 柵志

南山くむく「月」は河舟の
鯉昇

葉枯のまううくう思日か那
是有

はるか叶乃まういれてや和那
方壺

呼吸のまういれてや和那
柵也

とねとをかんて疑ぬ少お舞
芦川

あふ風の證くく松のまういれ
巴牛

とくくいれおくも垣を隔く
知白

袖くく紺色くまやむく河
観我

去何
 雄多
 馬德
 一扇
 文石

此—菴祥忌

月川
 月村

戸川
 瓜泥
 其玉
 亞溪
 文豹
 千婦
 遠道
 雄紅

昔は文一のつれづれと妻のつれづれ
とあつたまゝにわかれぬわかれぬ

訪人からかきあや我れもと

井溪

ねんねとつれづれと枯れつ

つれ

ふらり時やふらり暮る夜の波

湖平

あつたまゝに西条津のうらむ世化る

立卜

比捕らりてうらむ捕とのけしむを

号笠

あつたまゝに世化るのまじりつれづれ

唾玉

風は流るる言のむらりや和けぬ

瓦工

あつたまゝにうらむつれづれ

方廣

あつたまゝにうらむつれづれ

班鳩

むしつれづれとあつたまゝに
あつたまゝにうらむつれづれ
あつたまゝにうらむつれづれ
あつたまゝにうらむつれづれ
あつたまゝにうらむつれづれ
あつたまゝにうらむつれづれ
あつたまゝにうらむつれづれ
あつたまゝにうらむつれづれ

あつたまゝにうらむつれづれ

伊吹亭

重厚

口の向の男もあえ——あや夜ふ
 至方
 ちりちりあまなま——あけ雨
 浮木
 ちりちりあまのま——あまあふ
 石應
 ちりちりあまも——あけのま
 棋倉
 何事——あけのま——あまあふ
 杜音
 和——あまあふ——あまのま
 如風
 蛭子海——あまのま——あまのま
 米兮

一筆をて書く吾社くと
 とよりあまのま

口の向の男もあえ——あや夜ふ
 標列
 漢中の地——あまのま——あまのま
 枕成
 口の向の男もあえ——あや夜ふ
 土龍
 ちりちりあまのま——あまのま
 麥四
 ちりちりあまのま——あまのま
 木子雪
 ちりちりあまのま——あまのま
 丁峨
 ちりちりあまのま——あまのま
 好可ぬ
 ちりちりあまのま——あまのま
 素風

まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱
まの世くまのや粟津の西宮柱

翠壺

丈水

曉太

巴橋

船里

曾登

蕉門書林

皇都寺町通三條

橘屋治兵衛梓

